

平成 27 年 3 月 26 日

平成26年度総合文化研究所研究助成報告書

研究の種類 (該当に○)	海外共同 ・ <u>共同研究</u> ・ 個人研究	
研究代表者氏名 所属職名	伊藤まゆみ 看護学部 教授	
研究課題名	終末期ケアにおける看護学生の心的衝撃への心理教育的支援に関する研究	
研究分担者氏名	所属職名	役割分担
石渡 智恵美 大場 良子	看護学部 助教 埼玉県立大学保健 医療福祉学部講師	調査の実施 研究計画, 実施
金子 多喜子	杏林大学保健学部 講師	研究計画, 実施, データ解析
藤塚 未奈子 難波 美恵子	看護学部 助手 看護学部 助手	調査の実施, データ整理 調査の実施, 会計
研究期間	平成 26 年 4 月 1 日 ~ 平成 27 年 3 月 3 1 日	
海外共同研究を実施することになった経緯 (海外共同のみ)		
<p>研究発表(印刷中も含む)雑誌および図書</p> <p>(1) <u>伊藤まゆみ</u> (2014) 看護実習における教育的カウンセリング 小玉正博・松井豊 (編) 生涯発達のなかのカウンセリングIV—看護現場で生きるカウンセリング— サイエンス社 pp225-244.</p> <p>(2) <u>伊藤まゆみ</u> (2014) 第1章対象の生き方を尊重した健康支援のための基礎的技能, 第2章コミュニケーション・スキル, 第3章対人コミュニケーション, 第6章さまざまな看護場面に活かすコミュニケーション・スキル: 第1節 終末期ケア領域 <u>伊藤まゆみ</u> (編) 看護に活かすカウンセリング I : 生き方を尊重した健康支援のためのアプローチ—コミュニケーション・スキル— ナカニシヤ出版 pp.3-22, 67-76.</p>		

研究実績の概要（1）

研究1：終末期ケア実習における看護学生のケアに対する意味づけがケア効力感に及ぼす影響

【目的】

終末期ケア実習において看護学生のケア行動を促進するためにはケア効力感を高めることが課題となる。質的調査によって看護学生の終末期ケア効力感には意味づけが関係することが示唆されている。本研究目的は終末期ケア実習における看護学生のストレスフルなケアに対する意味づけと終末期ケア効力感との関係を検討することである。

【用語の定義】

本研究では“終末期ケア効力感とは、終末期がん患者やその家族に対してケアを行う前に、ケア提供者がケアによって望ましい結果を得るためにケア行動を首尾よくできるだろうと確信することである”と、“ストレスフルなケアに対する意味づけとは、ケア提供者が患者のケアに直面することで心的衝撃を受けたり、苦悩を感じたりする不快な感情体験に対し、情緒を安定させようとして、同化による意味の理解、調節による新たな意味の発見、その調節体験における生成された意味を知覚（付与）することで、認知的に対処することである”と定義する。

【方法】

1. 調査対象：看護学実習で終末期患者や予後不良の患者を受け持った看護学生である。
2. 調査時期：2014年9月～2014年12月
3. 調査方法：
 - (1)質問紙は個人属性、看護師用終末期ケア効力感尺度（下位尺度：対話効力感、看取り効力感、疼痛緩和効力感）、看護師用ストレスフルなケアに対する意味づけ尺度（下位尺度：意味の発見、意味の付与、意味の理解）で構成された。
 - (2)全国50校の看護師養成教育機関に郵送で調査を依頼した。
 - (3)調査の趣旨、方法を書面で説明し、同意が得られた場合のみ、調査に回答するように依頼した。

【倫理的配慮】本研究は共立女子大学研究倫理審査委員会の承認を得た。

【結果】

1. 調査用紙の回収65名（21施設）であった。
2. 65名のなかから年齢、実習時期、実習日数により46名（男性2名、女性44名、平均年齢22.6歳、平均受持期間9.0日）を抽出し、分析対象とした。
3. 各尺度間の関連を確認するために相関分析を行った。その結果、意味の理解は対話効力感と、意味の付与は対話効力感と看取り効力感とに弱い相関があり、5%水準で有意差を認めた。
4. 意味づけの程度によって終末期ケア効力感に違いがあるのかを確認するために、意味づけ各下位尺度得点を、平均値を基準に3群（高群、中群、低群）に分類し、一元配置分散分析で3群間における終末期ケア効力感尺度得点を比較した。その結果、意味の発見では対話効力感と看取り効力感に群間差があり、意味の付与では対話効力感に群間差があった。いずれも意味づけの高群における終末期ケア効力感が最も高く、5%水準で有意差を認めた。

上述の結果より、看護学生はストレスフルな終末期ケアに対する意味づけ（認知的対処）を行うことで終末期ケア効力感を高めていると考えられる。

研究実績の概要（2）

研究 2：ケア意味づけ支援プログラムの開発：終末期ケアにおける看護師のケアに対する意味づけがケア効力感に及ぼす影響

【目的】

終末期がん看護に携わる看護師に、カウンセリング技法を用いた認知的対処による意味づけ支援を行うことで、終末期ケアに対する効力感の向上効果を検討することである。

【方法】

1. 参加者：終末期がんケアに携わる看護師 38 名（1 回目 18 名，2 回目 20 名）。
2. 実験時期：1 回目平成 26 年 8 月～平成 27 年 2 月まで，2 回目平成 27 年 3 月～9 月予定。
3. 実験計画：実験計画は 2×3 の混合計画，第 1 要因は実験条件の 2 水準（実験群・統制群）の被験者間計画，第 2 要因は測定時期の 3 水準（介入前・介入直後・介入 3 ヶ月後）の被験者内計画であった。また，参加者を希望で 2 群（実験群と統制群）に分類した準実験であった。
4. 測定用具：看護師用ストレスフルなケアに対する意味づけ尺度と終末期ケア効力感尺度を用いた。
5. 実験手続き

実験群は、「カウンセリング技法を活用した患者の苦悩への支援研修」を 2 日間受講し，介入前（1 回目），介入直後（2 回目），介入 3 ヶ月後（3 回目）に質問紙調査を行った。統制群は研修を受講せず，実験群と同時期に質問紙調査のみを行った。

【倫理的配慮】 本研究は共立女子大学研究倫理審査委員会の承認を得た。

【結果】 1 回目の介入データのみ分析，2 回目の介入データは調査途中である。

1. 参加者：途中辞退や調査用紙の記入漏れによって，最終的に実験群 5 名，統制群 9 名となった。参加者は全て女性であった。平均年齢は実験群 29.6 歳（SD8.17），統制群 30.9 歳（SD4.83）

2. 分析結果

(1) 実験群と統制群の介入前の尺度得点を比較し，両群が等質なグループかを対応のない t 検定で確認した結果，両群の尺度得点は 5% 水準で有意差がなく，ほぼ同程度のグループであった。

(2) 実験条件と測定時期を 2 要因とする分散分析を行った。

① ストレスフルなケアに対する「意味の付与」は 2 要因分散分析で測定時期の主効果 ($F(2,24)=7.73, p<.1$) と交互作用 ($F(2,24)=4.19, p<.05$) を認めたため，単純主効果の検定を行った結果，介入直後 ($F(2,24)=18.64, p<.01$) と介入後 3 ヶ月 ($F(2,24)=14.66, p<.01$) において統制群に比べ実験群が有意に高かった。また，実験群は測定時期 ($F(1,12)=6.18, p<.05$) における主効果を認めた。

② 終末期ケア効力感：「対話効力感」では実験群は上昇し，統制群はほぼ変化がなかった。2 要因分散分析で測定時期の主効果 ($F(2,24)=5.94, p<.01$) と交互作用 ($F(1,12)=3.70, p<.05$) を認めたため，単純主効果の検定を行った結果，統制群に比べ実験群は測定時期の主効果を認め ($F(1,12)=4.63, p<.05$)，介入後に有意に上昇していた。

上述の結果より，介入による効果は，意味づけにおける「意味の付与」と終末期ケア効力感における「対話効力感」に認められた。この結果より，カウンセリング技法を用いた意味づけ支援は，看護師の終末期ケア効力感の向上に効果的であると考えられた。しかし，1 回目の参加者が少なく，その結果も限定的である。現在，3 月に追加で介入支援を行い，その効果を調査中である。